祭 REDISCOVERY

ずいき祭〈北野天満宮（京都府）〉

学問の神様として有名な北野天満宮。10月1日～5日に催行される、京都の代表的な秋祭として知られる北野天満宮ずいき祭（瑞饋祭）は、第62代・村上天皇の時代〔天慶9年（946）～康保4年（967）〕に、御祭神菅原道真公が大宰府で彫られた木像を随行の西ノ京の神人（じにん）が持ち帰りお祀りし、秋の収穫時に野菜や穀物を供えて感謝を捧げたのが始まりと伝えられています。現在は、北野の神を西ノ京の御旅所に迎えてずいき神輿を奉り、収穫に感謝の誠心を捧げる祭礼になっています。ずいき神輿は、西ノ京の神人により野菜・乾物等で趣向をこらした絢爛華美な御輿。これはかつて北野祭（例祭）にお供えとして奉られた野菜を、慶長の頃から一基の大型御輿として作り飾りつけるようになり、屋根はずいき芋（里芋の茎）で葺き、神輿の全体の飾り付けは、唐辛子・ホオズキ・トウモロコシ・カボチャ・湯葉・麩などの乾物類で覆われています。四隅にさがるみごとな瓔珞(ようらく)は乾燥した金盞花（きんせんか）の花をびっしりとつけたもので、御輿の四面には、謡曲や昔話から採った人物の作り物などが取り付けられています。江戸時代には8基ほどが各町から出ていましたが、今では、西ノ京の2基のみとなっています。



10月1日:一日目、午前中、鳳輦（ほうれん）に神霊・天神さま(菅原道真公)を移す出御祭が行なわれ、午後から導山をはじめ三基の鳳輦と鉾（梅鉾・松鉾）・神職などが氏子地域を巡行して、西ノ京の御旅所に向かいます。御旅所到着後に着御祭が行なわれ、八乙女舞（やおとめまい）が奉納されます。鳳輦は野菜・乾物などで飾り付けしたずいき神輿とともに4日まで奉安・駐輦されていて観覧は自由に行なうことが出来ます。二日目は御旅所で表千家宗匠による献茶祭。三日目には、午後から御旅所で甲御供奉公饌（かぶとのごくほうせん）が行なわれます。甲御供奉公饌は、大永7年（1527）、阿波の三好長基が都に攻め入った時、将軍足利義晴の管領細川高国はこれを桂川に迎え撃ったが敗退。たまたま入洛していた越前の守護職朝倉敏景はこれを聞き、西ノ京の神人と協力して三好勢と戦い、長基を阿波に追い落としました。将軍義晴は、神人の巧を賞し、3月3日・9月9日を吉例の日として北野天満宮に甲の御供を沙汰したと言われています。四日目は午前に御旅所で出御祭が行なわれ、牛が曳く御羽車・鳳輦・鉾・神職などが氏子地域を巡行して北野天満宮に戻ります。天満宮到着後には着御祭（還幸祭）が行なわれます。なお行列に先立ってずいき神輿が巡行します。五日目、午後から后宴祭（ごえんさい）が行なわれ、拝殿前では、氏子地域より選ばれた女児による八乙女舞が奉納されます。

ふとん太鼓〈百舌鳥八幡宮（大阪府）〉



大阪・堺市の「仁徳天皇陵」の近くに位置する「百舌鳥（もず）八幡宮」の秋祭り「ふとん太鼓」が、中秋の名月に当たる旧暦8月15日にかけての土、日曜の2日間行なわれます。この秋祭りは通称「月見祭」と呼ばれ、稲の豊作を祈る祭りと満月を祝う風習が迎合した例祭として、300年以上の伝統があります。近年は《勇壮華麗なふとん太鼓》として有名になっています。太鼓を納める台座の上に、5段からなる朱色の座布団が積み重ねられた形状を称して「ふとん太鼓」と呼ばれていて、台座部には荘重・微細な彫刻、ふとん部には金縄や大小の飾り房で華麗に装飾が施されています。高さ約4メートル、重さ約2トンという大きさで、約70人ほどで担ぎます。氏子地域9町からそれぞれ大小一基ずつ（小さいふとん太鼓は子供太鼓）、各町ごとに特徴のある合計18基が「べぇらべぇらべらしょっしょい」と威勢のいいかけ声とともに練り歩き、ふとん太鼓奉納行事が行われます。

文:ODA広報委員会　イラスト:大和田　昌